

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	コロナ禍における成人看護学領域で必要とされる看護実践能力の獲得に関する 臨地実習プログラムの評価と検討				
研究組織	代表者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	山田 紋子
	研究分担者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	田中 範佳
		所属・職名	看護学部・教授	氏名	林 みよ子
		所属・職名	看護学部・講師	氏名	前野 真由美
		所属・職名	看護学部・助教	氏名	鈴木 郁美
		所属・職名	看護学部・助教	氏名	中岡 正昭
		所属・職名	看護学部・助教	氏名	星 有紀
		所属・職名	看護学部・助教	氏名	長谷部 美紀
	発表者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	山田 紋子

講演題目	コロナ禍における成人看護学領域で必要とされる看護実践能力の獲得に関する 臨地実習プログラムの評価と検討
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>【背景・研究目的】 令和2年度以降の臨地実習においては、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、実習日数および時間の短縮や午前・午後に分散しての少人数による臨地実習、カンファレンス回数の減少、オンラインによる看護過程展開に関する教員指導等の変更を余儀なくされている。そのため、従前の臨地実習と同等の教育効果が得られているのかについて検証していく必要があると考えた。以上のことから、本研究の目的は、本領域の実習科目である「慢性看護学実習」「急性期看護学実習」(3年次後期履修科目)、「臨床シミュレーション EBN 実習」(4年次前期履修科目)に焦点をあて、それらの教育プログラムの評価を行うこと、評価を踏まえてプログラムの再検討を行うこととした。</p> <p>【研究方法】 第1に、コロナ禍前である令和元年度、コロナ禍での履修となった令和2～4年度の評点および授業評価について、実習科目ごとに量的に比較した。第2に、継続的に本領域の臨地実習に携わっている臨床指導者3名、すべての実習を終了した4年次生5名にヒアリング調査を実施した。第3に、第1、第2の結果を踏まえ、研究者間で実習方法について検討した。</p> <p>【結果・考察】 各年度生の評点および授業評価の点数比較では有意差は認められず、平均点等に大きな差はなかった。ヒアリング調査では、学生からは臨地の滞在時間が短縮となった施設において「患者ケアを実施する時間がよりあれば良かった」との否定的な意見がある一方で、「それらの時間を看護過程の展開や思考の整理に充当できじっくり取り組めた」、「帰宅後にオンラインで教員から助言を受けられて良かった」などの肯定的な意見もあった。臨床指導者からは、「患者ケアの時間は減ったが、その分学生は短時間で集中して実践し、従前と遜色ない成果をあげていたと考える」との意見があった。これらの結果から、コロナ禍におけるプログラムの教育効果は従前と比して違いはないものの、学生の学びにとって一長一短があることが示唆された。よって、それらを活かし、今後のプログラムでは臨地滞在時間を戻しつつ、学生が集中して実践できる環境を維持し、オンラインによる指導を継続していくこととした。</p>